

青島健太、聖歌隊の澄みきつたハーモニーに感動

学校はいろいろな感動であふれています。スポーツライターの青島健太が学校を訪ね、自らの感激を熱くレポートします。第2回は、神奈川県横浜市、横浜雙葉中学高等学校・聖歌隊を訪問しました。



Yokohama Futaba Junior & Senior High School

残響のよい聖堂に乙女たちの澄みきつた声が響き渡る。その歌声は聴く者の周りを旋風（つむじかぜ）のように優しく回り、その体を持ち上げるように軽くする。宙にあがっていく感覚。

指揮をとる川上先生が、アコーディオンを縦に弾くような仕草で、両手を体の前で上下に広げていく。するとそのサインを受けた乙女たちは、歌声をさらに澄ませ、伸びやかにそれぞれの声をシンクロさせていく。

この時、聖堂の中の空気の分子が、一粒残らず震えているように感じた。その気持ちよさに、不覚にも動けない。

キリスト教では、聖歌が大切に歌い継がれている。聖歌を歌うことは、祈りの気持ちを増幅すると考えられているからだ。聖歌隊は、歌うことで祈りを届け、また人々の祈りをその歌声でリードしていく。

厳かな使命の中で生徒たちがのびのびと取り組める環境はあるのだろうか。顧問の吉田先生が教えてくれた。

「隊員たちは、もちろん神のメッセージを伝える役割を自覚していると思います。しかし、特に宗教活動としてそれを意識させるようなことはなく、老人ホームに歌に行ったり、コンサートに出場したり、楽しく和気あいあいと活動してい

ます。」

生徒たちに話を聞いても、みんな伸びやかで屈託がない。誰でも自由に入れる聖歌隊。入隊の動機もさまざま。

中学生の國賀さんは「姉が入っていたので、私も入りました。」同じく中学生の鈴木さんは「コンサートをみて感動したので。」「入学式で校長先生に勧められて入りました」と言つて、みんなを笑わせたのは中学生の木下さん。とにかくみんな明るい。

ソプラノのリーダー白幡さんは大の阪神ファン。アルトのリーダー塩田さんは松井秀喜と清原和博が大好きな巨人ファン。（ここは横浜なのに。ベ이스ターズ頑張れ。練習が終わるや始まった二人の野球談義。その横で副隊長の田村さんが、こつそり教えてくれた。「隊長は優しいので、何かあると私と白幡さんが雰囲気をつめる係なんです（笑）。」こんな話を聞くと、何故かホッとします。みんなリアルな中学生、高校生たちなのだ。ゆかいな仲間を代表して隊長の芦沢さんが隊の活動を説明してくれました。

「発表会が近づくと朝練をしたり、昼休みにも練習します。英語ラテン語、フランス語の曲もあつて難しいんですが、みんなでチャレンジし

ています。美しいハーモニーができた時の感動は、他では味わえないものがあります。」

ご自身も声楽家として活躍されている川上先生に、気になった例のサインについて訊いてみた。

「あれですか？人間の体は、それ自体が楽器と同じですから、縦に長く大きく使うようにという意味なんです。最初はなかなか声が出なかつた生徒たちも、中学1年から高校2年まで5年間歌い続けると、それはもう信じられないほど素晴らしい声で歌えるようになります。その変化はまさに感動的というしかありません。」

ハーモニーを奏でる喜び。ひとりひとり小さな存在であっても、それを束ねることで生み出せる大きな力。学生時代にその協調の楽しさを知ることが、生徒たちに喜びの作り方を授けることになる。

人はみな残響の中に生きていくのだと思う。学生時代に乞うた教え。みんなで生んだハーモニー。その喜びの音をたよりにそれぞれの未来に舟を出す。

港を見下ろす山手の丘に、今も響く聖歌隊の歌声。その響きは、清く正しく進めと沖往く舟の風となる。




青島健太
スポーツライター・キャスター
昭和33年(1958)4月7日、新潟県新潟市生まれ。春日部高一慶応大一東芝と進み、昭和60年(1985)ヤクルトスワローズに入団。5年間のプロ野球生活引退後のオフ、半年間の研修の後オーストラリアへ日本語教師として渡り、厳しいプロ野球生活の中で忘れかけていたスポーツをする喜びや、楽しみ方を思い出し、その素晴らしさを伝え手となることを決意し帰国。スポーツライターとして新しい道を歩き始める。現在はあらゆるメディアを通して、スポーツの醍醐味を伝えている。鹿屋体育大学、流通経済大学、日本医療科学大学 客員教授